神戸新聞 2020年02月11日 火曜日 面名 朝二 １４ 2ページ

名前【　　】

識者評論

船内待機、代替手段なかった

国際医療福祉大医学部
和田耕治教授

クルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス」で新型コロナウイルスの集団感染が起きたが、感染の確認と対応が遅れたまま、乗客が下船していたと仮定したら、事態はどうなっていただろうか。国際的にもっと大きな問題になっていたかもしれない。

船内で見つかった感染者は10日時点で、130人を上回った。ウイルスを高精度で検出するPCR検査を行っているとはいえ、検体の採取ができず、陽性なのに陰性と判定されている人がいるかもしれない。検査をしていない人の中にも、具合が悪い人がいるとの報告もある。

船内は閉鎖空間ということもあってか、ある程度のアウトブレイク（突発的な集団発生）が進行していたといっていい。

乗客の入国を受け入れたとしても、大規模な人数を受け入れる施設は国内になく、多言語対応なども難しい。このため今のような待機を強いられていることは気の毒である一方で、代替手段はなく、やむを得なかったといえる。

もし乗客のほとんどが日本人ということであれば、自宅に戻って、地元の保健所による健康監視も選択肢として挙がるが、半数以上が日本人ではないことから、こうした対策も難しい。

高齢者や障害者、持病がある人がおり、薬不足も報告されている。今後メンタルヘルスへの配慮など、さまざまな課題が生じ得る。

別のクルーズ船でも、同ウイルスによる肺炎を発症した恐れのある人が確認されたため、政府は乗船している外国人の入国を拒否すると表明した。クルーズ船の増加により健康を巡る危険が生じた際の課題は以前から指摘されていたが、対応を十分議論できていなかった。

クルーズ船に限らず、入国を制限するといった「水際対策」はいつまで続ければいいのか。感染が終息すれば当然やめられるが、感染は今後数カ月単位で続くと考えられる。水際対策は本来、時間稼ぎであり、国内での医療体制を整備するのが目的だ。

2009年の新型インフルエンザ流行の際に、初期にはイベントの中止や学校休校、出張の制限、買い占めによる日用品の入手困難といった例もみられた。

致死率などの重症度がある程度把握できたら、水際対策を緩めて、治療に重点を置くことになる。しかし政府が対策を強めるのは難しくないが、柔軟性をもって緩めることは、政治的になかなか困難なのが実情だ。

新型インフルエンザが流行した際も、水際対策の緩和は国会などの場で、専門家をまじえた議論が交わされてからのことだった。

ダイヤモンド・プリンセス内に残る乗客が下船できるようになるのは、19日以降になる見通しだ。乗客が下船後に誤った差別、偏見にさらされないようにしなければならない。

わだ・こうじ　1975年生まれ。北九州市出身。産業医科大医学部卒。北里大大学院博士課程修了。18年4月から現職。専門は公衆衛生学など。

(C)神戸新聞社 無断転載 複製および頒布は禁止します。

① この記事の見出し「船内待機、代替手段なかった」の理由を記事中から見つけ出し、2つ書きましょう。

（　　）

（　　）

② 「入国を制限するといった水際対策は本来、時間稼ぎだ」と言っています。何のための時間稼ぎでしょうか。

（　　）